



奥行きたっぷり大型専用 サイズ違いでも連結可能

日本を代表するオーディオラックブランドのひとつであるサウンドマジック。同ブランドからマッキントッシュをはじめとしたハイエンドアンプのユーザーを主なターゲットとした、奥行きたっぷりの大型機器用のオーディオラックEXシリーズが発売された。同シリーズは、同社の合わせ防弾ガラス仕様ラックでも採用されている高品位クローム仕上げの支柱やスパイク、24mm厚のMDF棚板を採用。非常に強固な仕様となっている。さらに棚板の大きさは3種類が用意され、大型アンプだけではなく、小型オーディオ機器にも対応。サイズ違いでも連結が可能という画期的な構成だ。その音質と機能性の高さは早くも認められ、本年度の「オーディオアクセサリ銘機賞2019」も見事に受賞を果たした。その実力のほどを、防弾ガラス仕様ラックも高く評価する炭山アキラ氏がレポートする。

Text by
炭山アキラ
Akira Sumiyama
Photo by 田代法生



SOUND MAGIC EX Series

オーディオラック
※写真のモデルは「EXL2M1Cr」¥200,000(税別)
+オプション支柱105mm(¥3,950・税別)×8個

●下段・中段奥行き670mmの24mm厚特殊MDF ●上段奥行き570mmの24mm厚特殊MDF ●支柱&スパイク高品位クローム仕上げ(支柱はオプションで105mm、50mm、38mmの選択が可能) ●サイズ:605W×670D×502Hmm ●棚板サイズ:下段・中段=605W×670D×24Hmm、上段=605W×570D×24Hmm ●取り扱い:ネットワークジャン(株)

防弾ガラスラックに匹敵する クオリティと利便性を追求

サウンドマジックが、このところ勢いづいているようなイメージがある。元ほといえ、廉価ながらもなかなか侮れないクオリティを有するラック群をリリースするメーカーという印象だったが、数年前に突然、3枚重ね防弾ガラスの棚板を持つ圧倒的クオリティの高級ラックを発売し、あまりの音のアクセントさ、超音速的ハイスピードと大岩のような揺るぎなさに衝撃を受けたものだった。

その強烈なラックに匹敵するクオリティを、何とか一般的なウツドの棚板で実現することはできないか。しかも、昨今多くなってきた奥行きが深いパワーアンプなども楽に置けるような、そんな余裕を持ったサイズのラックで、機器の持ち味を損なうことなく表現できるラックを作りたい。そんな情熱が結実したのが、このたびの新製品EXシリーズである。棚板は

防弾ガラスが持つ二刀両断の切れ味に比べ 絶妙の聴きやすさと柔らかな質感がいい

24mm厚のMDF材で、叩いても鳴きは少なく、叩く指を跳ね返すような強度を持つ。木口はいていねいに面取りされ、ダークなマット塗装で仕上げられた、落ち着いた質感の棚板である。支柱はクロームメッキのローカーボン鋼製で、叩いても鳴きは特に少ない。何か詰り物でもされているのかと思ったり、パイプではなくソリッドの鉄柱なのだという。1段ずつ載せていくタイプのラックで、それぞれがスパイクと受けて連結されている。スパイクの斜面は急峻な方で、先端もかなり尖った部類だ。スパイクの持ち味が出やすい構成といえる。最下段のスパイクは、同社の純正ともいえる真鍮製の受けて支える。なお、各段のスパイクを外し、支柱をダイレクトに連結させることも可能という。

奥行きの違い棚板同士を ドッキングして使用できる

面白いのは、奥行きが違う棚板を取り混ぜて使うことができるよ

うになっているところだ。4本の支柱の位置は統一しておいて、後ろの支柱より奥行きを伸ばした棚板が用意されている、という格好である。奥行きを伸ばした棚板を取り付けることができるよう、ザグりが加えられている。

音が太くて実体感が豊か ウッドイ的な響きも魅力的

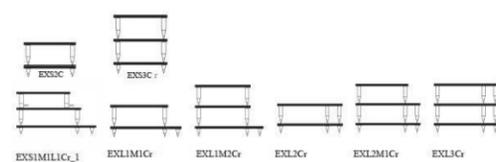
取材は本誌試聴室で行った。たまたまアナログ盤を持参していたので、プレーヤーとプリ、そしてフォノEQを、レファレンスのラックから入れ替えて音を聴き比べる。まずクラシックから聴いたが、音が太く実体感豊かに飛び出してくるのが実に好ましい。レファレンスのラックはもろろん相当の高級品で、価格帯にして数分の1になるうかと思うが、それでどこことなく音が痩せたり飛んでこなくなったり、ということがまるでないのは素晴らしい。さすがに防弾ガラスのラックと比べれば音はいさ

さかまろやかな質感だが、この場合はあちらがある種の「異能者」なわけで、このクオリティはかなり高度といわなければならぬ。続いてジャズを聴こう。一聴してソロ楽器にこくほんの僅かウッドイな響きがあり、これはこれでジャズ的な質感としてはとても好ましい鳴りっぷりである。ここでも音場が狭まったり音が飛ばなくなったりすることは全然なく、むしろどっしりと太く、ややブラックな傾向を感じさせる味わいがある。ピアノがフレームの金属質から筐体の響きが勝ったバランスへ、いくらかだが移り変わったのも興味深い。ジャズピアノとしては、この方がむしろ正統的な鳴り方と言ってよいのではないか。

お次はポップスのレコードをかける。イントロが混成のコーラスから始まる曲のだが、そのコーラスがどっしりとピラミッド型に鳴り渡ったのには驚いた。しかも、男声が洞間声になることがなく、声の質感自体は太く浸透力の高いものだ。メインヴォーカルもたつぷりと歌い上げ、バックの演奏も広大な音場にそれぞれのメンバーがガツンリ定位し、ドラムのアタックは僅かに柔らかな質感をまといながら、それでも爆発的パワー

を伴って鳴り響く。防弾ガラスに特有の峻険さ、一刀両断の切れ味のようなものの代わりに、こちらは絶妙の聴きやすさと音の太さ、高品位さを手に入れたといつてよいだろう。よほど突き詰めたシステムでない限り、こちらのラックの方がむしろ扱いやすいのではないかと、とも感じた。

3段構成で20万円ちょっとだから、現代のラックとしてはどちらかというと廉価な部類に属する製品だが、実力はかなり高い。数百万円クラスの機器でも、十分に持てる実力を発揮してくれるのではないかと思う。少なくとも、20世紀からラックを買い替えていないという人がおいでなら、十分選択肢に入れてよいのではないか。



EXシリーズのバリエーション豊かな組み合わせ例